

地藏菩薩靈驗記、山槐記、百練抄、明月記等には一も該傳説に及べるものなく、殊に貞治二年沙門觀賞撰述の六波羅蜜寺勸進帳の如き、本圖識語の前半の典據と考へらるるにも拘らず、遂に鬘懸傳説に及んで居ない。のみならず康頼寶物集には本寺地藏像に關して、却つて異曲同工の土おくり傳説があり正しく本傳説の藍本であらうと解せられる。而して此の傳説の構成に一種の近世的色彩の濃厚なると、出來齋京土產以下の近世の案内記に此の傳説を散見することの多い事實は、此の傳説の起源がたとひ徳川期に入つて後のものでないとしても、さ程遠くは上らないものかと思はれる。随つて食堂安置の地藏像の如きも無論當初より毛髪を手にした像でなく、後世、此の傳説に附會せるものか、或は逆に、有り得べき偶然の習俗から鬘懸傳説の發生を見たものでないかと思はれる。それが特に女人導引の思想に對して、土おくり傳説よりも一層切實なるものあるは、また此の傳説の發展をより多く合理的に解釋し得るであらう。

こゝに掲ぐる鬘懸地藏緣起は現時僅にこの一斷片を傳存するのみにして、其の詞書の如きも影本面に見らるゝ三行餘を遺すに過ぎないが爲めに、殆んど其の傳稱の當否を想定し難いが、斯幅識語に依るも、此の一段に就きて云はゞ、少くも鬘懸地藏傳説の繪であることは信じ難く、寧ろ六波羅蜜寺地藏緣起或は地藏堂緣起とも云ふべき繪卷の一殘缺と見るべきであらう。

今、仔細に其の圖樣畫致を觀るに、圖を構ふること簡素にして、筆を行ふことまた頗る輕淡、加ふるに賦彩の如きも、概ね雅醇の體を留めて僅に地藏の圓、光と梅花とに淡朱を、人物の服飾に部分的な白綠等を加へてゐるに過ぎない。また圖上の霞引の如きも鎌末以後の諸作に見る重鬱な表現法に據らずして専ら簡素なる手法を賞用し、全畫面に一種の愛すべき稚氣を横溢せしめてゐる。無論其の半面には本圖が既に足利中期以後の多數のお伽草紙の作品に漸く近づきつゝあることを示してゐるものがあるが、而も此の簡素なる手法のうちには尙一味の古致を留めてゐる。また本圖詞書の書風より見るも一面には既に御家流の胚胎をも感ぜらるゝにも拘らず、尙古樣を傳へてゐると一致してゐる。寺傳に依れば、本圖は土佐光信の作と稱されてゐるが、所謂光信或は光信一派と想

像し得べき諸作に比して、畫致畫品の頗る遠きものあり、要するに附會の説なことは云ふまでもないであらう。のみならず、本圖が一面に見るが如き女性的な纖弱な畫致に墮しながらも、尙、頼焼阿彌陀緣起繪の如き樸實な流風を傳へて居るものとして、恐らく南北朝以後足利中期に至るまでに繪かれた一作品であらうと想像せしめる。無論鎌倉盛期の緣起繪卷に比しては劣ること萬々なるも、また一種の畫蹟とすべきであらう。

由來足利期は地藏信仰の都鄙に弘通した時代で、將軍義政の如きも其の信仰特に厚かりしこと蔭涼軒日録にも見え、其の他初世以來地藏像造立に關する記録は非常に多いから、本圖が鬘懸地藏傳説を取扱へる一斷片なると否とは第二として、此の種の作品の當代に繪かれたことも亦偶然ではない。(田中)

四、因陀羅筆 丹霞燒佛圖

侯爵 黒田長成氏藏

紙本墨畫 掛幅 竪三五厘 横三七厘

畫全體が淡墨仕立てで、その單調を破る濃墨として或は補景の樹木中に點苔かと見えるほどの雜樹などがあり、人物も著衣のそここゝ(襟、袖のへり、紐など)殊には面部に於ける眼鼻口耳等の備へ、手に握りたる杖などにをかしう焦墨を加へて、さなくば如何にぬむかるべき淡墨の畫面を起きよゝと揺り覺まし、更に衣は梁楷の減筆に適宜の圓みと柔みとを加へた折蘆の自在なる一變體、頭顱と件の眼鼻口とは、或は杖握り或は火にかざす手と共に癡とも覺ゆる滲み(ニジ)がちの戰筆描を用ひて、輪廓足らざるが如くまた餘るが如く、且つ禿げ残りの頭後の髪と口邊の髯とは常に有るか無きかに渴擦を以て加ふことを忘れず、樹法に至りては昔人の謂ゆる飛白、篆籀といふも斯くやと思はれて、法と名づくるには少しく當らざるかと危まるゝほど奇に、若し夫れこゝぞ其畫の筆の擱きどころと思はるゝ樹幹の先端に及べば、はや硯の水は切れたり、墨の命もこれまでと見ゆるを、唾もて漸くに濕しつゝ、さゝくれたる筆の腹を暴氣に臥せ著けて、下より逆に揉み上げ、また上よりこすり下ろして、それでも畫きたい程のことは畫けたとて、畫中の人物と共に大口開きて呵々と笑ひけむ。この用

墨と用筆とを觀れば、人間はずして元僧因陀羅が禪餘の墨戲なることを知る。

日本に傳へて眞蹟とすべき因陀羅の畫、僅かに五七指を屈すべき中に、淺野、黒田の兩侯並に東京根津、横濱原の兩氏等に藏する諸圖は、おの／＼元僧梵琦楚石の二行の贊を有し、且つそれ／＼畫面の幅を異にするも、高さに於て符を合し、またその畫致全く同時の作と考へられる點より見て、もとは何圖か繋がりたる卷の日本に渡りてのち切り離されたものと推測され、假に禪機圖卷殘缺など名けられて居る。思ふに根津氏の柳下布袋圖はその製作當初卷首に置かれたものであつたから畫面の右上端に關防印記の痕を留めるのであり、また淺野侯の松下寒拾圖は卷末の一片であつたればこそ、外の圖には見られぬ「宣授汴梁上方祐國大光教禪寺住持、佛慧淨辦圓通法寶大師王梵正」といふ因陀羅の自署を伴ひ、且つ畫面の左邊に一見奇しと思はれる程の廣い餘白があるのであらう。果して然らば楚石の

古寺天寒度一宵 不禁風冷雪飄々

既無舍利何奇特 且取堂中木佛燒

の贊を加へ、因陀羅が「兒童不識」云々の一印のみを押した黒田侯の丹霞燒佛圖は根津氏と淺野侯との兩圖に前後を圍はれながら卷の中途どのあたりに介在して居たものであらう。若し楚石語錄に「因陀羅所畫十六祖讚」「因陀羅所畫諸聖讚」に併せてこの卷に相當する贊語が載せてあれば問題は容易に決するものであらうが、恨むらくは語錄にこれを逸して居る。

因陀羅は昔から言ふ如く竺僧らしい、しかし今こちたき考證を省く。たゞ黒田侯の一圖に於ては丹霞を指す傍觀者の手がわが鎌倉時代の繪卷病草子の構圖をも聯想せしめる巧慧の手段であることを注意したい。燒かるゝ佛は立ち上る煙と共に極めて象徴的に寫されて居る。(脇本)

五、雪舟筆 山水圖

東京 帝室博物館藏

紙本墨畫 掛幅 竪一・四九米 横三六極

圖 版 解 說

打ち續く京師兵亂の騷擾を厭うて西の方山口にこれを避けた雪舟が今は鎌倉に歸るといふ弟子の宗淵にせがまれて老眼を拭ひながら物した因縁明かな名幅で、(一)その畫が雪舟潑墨山水 別項「破墨の意義の變遷に就て」參照 の標範たる點に於て、また(二)その贊が雪舟みづからの閱歷を語るのみならず、(三)吾祖如拙周文と言ふことによつて我國水墨畫壇の傳統を明かにする點に於て、考へ方によつては少たる片幅を以て毛利公藏する所の所謂雪舟長卷にも代へ難き貴重の遺品である。或はこれを以て京都退藏院藏する所の如拙瓢鮎圖と併せて廣義に於ける我國詩軸中の雙璧と稱するも過言でなからう。贊中李在と竝べて長有聲の名を擧げた如きも支那畫史の闕を補ふものとして復た亦た早く美術史家によつて注目されて居る。

宗淵が雪舟に畫いて貰つた時その畫は水墨の部分と題語の部分と紙二枚繼だけのものであつた。ところが宗淵は相陽への途すがら、京都の五山を過つて平生景慕する宿老達を尋ね、雪舟の健在を示すことによつて宿老達に喜んで貰ふと同時に、更に紙二枚を繼ぎ足して題贊を請うた、これらの題贊は詩軸の形として屋上屋を架するものかも知れないが、内容に於て錦上添花を添ふる者であつて、當時の宗淵の脈々たる愉情はまた實にわれらの愉情そのものでなくてはならない。圖版では讀み悪いと思ふから、右五山宿老達の題贊を茲に寫し出して見ると左の通りである。

題畫師雪舟授筆法於宗淵藏主圖

胸中醉墨最奇哉、吐出酒旗山水潑、因憶聖門論繪事、芳名性數一顏回

前南禪暮齡七十八鹿苑周鏡

如水諱國遙、從關左行關右、隨雲谷、學丹青久矣、臨歸授以小畫、

蓋表信也、予亦作詩、稱之

雪盡江南水浸天、爲君掃出兩三椽、不知何處有梅在、上挿青帘下繫船

雪樵老衲景菴

畫僧雪舟、慕西湖瑩玉澗筆法、以饒宗淵藏主東歸、請余賦一章云

玉澗江山誰又夢、雨奇晴好對西湖、畫師亦有傳衣鉢、莫作平沙落雁圖